

時事新報

第三千七百九十一號
 明治廿四年七月四日 (辛卯)
 舊曆辛卯五月廿八日
 土曜日
 出版時間
 日 出 午 前 四 時 三 十分
 入 午 後 六 時 三 十分
 月 出 午 前 二 時 五 十分
 入 午 後 五 時 五 十分
 刊 日 出 午 前 三 時 五 十分
 入 午 後 三 時 五 十分
 (西曆一千八百九十一年)

時專新報

富豪の養生は今日あり

六日の真滴十日の菊とは人事の手後れを喻へたるものなり蓋し目前に迷ふて将来を戒めざるは其智見の足らざるに由るか抑も亦人情の弱點あるか人生の行路を見るに時を誤り後れを取らざるものは種類多きはなし例へば養生の事にも少年の時とは血氣盛にして唯意の赴く所に任せ飲食起居さらさらと頓着すけれども漸く年老いて壽命の長短を案する頃に至れば始めて前非を後悔して只養生に心を懸くるは其常あり少年にして身の強衰に注意する者稀あると均しく老人にして養生に關心せざる者も亦稀かれども是れは兩様とも非たるを免れず人身の強弱は一日の故に非されば老後の健康は少年の初めにみよるべきなるに老體に至り俄に養生に氣付きたりて過ぎし少年の時の不養生は如何にして能く之を回復すべけんや誠に明白なる次第あれども世の實際は則ち然るものと能はずして養生の手後れを恨む者比々みな是れあり又かの培林園種する者を見るに俗に年寄事と稱せらるる程ありて少年の之に従事する者は至て乏しく多くは老人からざるはかし若し少年の時より植付け置きたらんに其老年に至りて例の栽培に心懸くる頃既に拱手の太木となりて所得も定めて多かるべきに老先の短き晩年より漸く習するも亦あるが故に木の未だ繁盛するに身は先づ死して其目的を達せざる能はず此等は草木栽培の事後れにも申すべき敷更に適切に之を云へば應藩藩廳の御り士族に職券を與へ之を以て活計自立の基本とさしめたるに沿々たる士族輩は此職券を如何にせしや今年一枚を賣り明年二枚を賣り一年より減少して未だ幾ぞあるに悉く之を蓄積しサテ賣るべきものも無くなりて爰に始めて走路を求め、求めて得ざる者は車夫となり人足となりて世に憐れむべき慘境に陥りたるに非ずや是れも初めより基金を基金として堅く守り而して其傍に車夫にても人足にても糊口の工風をせしめれば基金はますます増大して今日の困窮を見ざるのみか餘利を子孫に貽すものと得たる可きに唯職券のあるに任せて日一日と空しく送り置て後來の爲めに警戒する所亦かりしは弓矢の取れば申さずとも其身の不覺は天下に對して又申請なきと云ふべし即ち士族が糊口の事後れにして人間萬事仔細に觀へ來れば唯手後れと否らざるによりて吉凶禍福を分つもの最も多き居るが如し蓋し此事たるや諷易くして行ひ易からず其言淺きに似て實は處世に欠く可らざるの要訣なり至大の理に至近の事を離れずといふ、心すべき事共あり

然り而して我輩が日頃の富豪に報告したる養生法即ち貧富間の縁情を和せんと爲め富豪が常に能く心を用ひて或は無理の外に堪へ難く思ふ處にも忍んで寛大の意を示す可しこの一事も亦前記の例證と其趣を同ふせざる可らず富豪の心には今の社會人心の和平あるに損れ又法律の周到あるを待み唯蓄積の一方に偏して他に顧る所亦く以て家を保ち身を安くす可しと思ふと亦ならん目下の實際に於ては如何にも妨なきが如くあれども其實は彼の少年が血氣に任せて暴飲暴食するものに等しく後日の成行ふを掛念され今後數年を経過する其間には醜しに醜したる社會の貧毒に破滅を促すの機會ある可きは勢の危かれざる所なり扱その時に至り俄に周章狼狽して養生保身の道を講ずると雖も時機既に晚くして復た奈何とす可らざるものと猶ほ老人が養生の手後れを悔ひ均しく死に垂んとするの病中驚て坐起するに當り暗風雨を吹いて寒窓に入るを叩つの外なかるべし開國の今日外に對して國家の重きを成す可き富豪の爲めに計り公にも私にも策の得たるものに非ざるのみか單に錢の損得より論ずるも老病の醫藥に手を盡して効験の薄き少壯の時節に養生するも費用の輕重は多言を俟たずして明白ある可し左れば天下の富豪は家の新舊に論ず其居家處世の筆法を改め冥々の間に人心を籠絡して以て家運長久の工風かかる可らず我輩は獨り其家の私の爲めにするのみならず國家の富豪として之を重んじ國家生存の爲めに大に恃む所のものあるが故に其否運の未だ至らざるに豫防せんといふ欲する者あり

官報

○逓信省告示第五十一號
 八月一日ヨリ近江國坂田郡長濱二等郵便電信局ヲ三郵便電信局ニ改定シ其事務ヲ取扱ハム

○逓信省告示第五十二號
 七月三日 逓信大臣伯耆後藤藤三郎
 八月一日ヨリ左ノ郵便電信局ヲ合併シ其事務ヲ取扱ハム

郡市名	郵便局名	合併局名
丹波國東郡	宮津郵便局	宮津郵便局
丹波國美作郡	高野郵便局	高野郵便局
丹波國丹波郡	森郵便局	森郵便局
丹波國美作郡	大津郵便局	大津郵便局
伊勢國渡邊郡	山田郵便局	山田郵便局
伊勢國西白河郡	白河郵便局	白河郵便局
伊勢國西白河郡	大河郵便局	大河郵便局
伊勢國西白河郡	白河郵便局	白河郵便局
伊勢國西白河郡	大河郵便局	大河郵便局
伊勢國西白河郡	白河郵便局	白河郵便局
伊勢國西白河郡	大河郵便局	大河郵便局

輸入額を増加するに至るの間亦多少の波瀾なきに非ず既に一兩年前の如きは粗悪品を輸入して頻りに競賣せし爲め我國製の隣寸は需用者なきに至り清商は其機に乗じて之を一手に握らんとしたれ共我有志者中には大に之を憂慮する者ありて漸く景氣を挽回し今日の形況にては益々販路を擴むるの望ある品あれば我事務官も大に此邊に注意する所あり商會議會に下問して調査したるを以て左に其要領を記さん

第一 京城に於て販賣する我隣寸の製造地及び仕入元は何處あるや

答 本邦人の輸入する隣寸は大坂今宮尼ヶ崎等の製品にして大坂に於て仕入を爲せり又外國商人の輸入するものは其出所を明かにせざれども清商中には大坂にて仕入れるもの有り云々其他は清國地方の製造に係るからん

第二 本邦より輸入する隣寸は安全質なるや又は危険質あるや

答 本邦商人は安全、危険の兩質共に輸入したれ共本年に至りて更に安全質の一方とあり危険質は甚だ稀なり

第三 當地にて販賣するは製造元よりの委託なるや各自の仕入なるや及び製造元の特約の有無如何

答 當地輸入の隣寸は製造元の特約多く稀には各自問屋の手を経て仕入るものもあるも委託販賣のもの更になし

第四 隣寸の商標又は其の最も賣行の多きは如何なる商標を付するものあるや

答 本邦人輸入の隣寸の内最も賣行宜しきは「鶴仙人」にして「二巴印」之に次ぎ「向い舞鶴印」は近時輸入にして可なり販路を開けり「象印」は清商の販賣するものにして其實行甚だ盛なり

第五 隣寸の包装方法及び一箱の容量は如何

答 本邦人の輸入品及び世昌洋行印の包装は薄板製角形の小箱にして其軸木數は角軸木凡を五十一より六十五六本位とし象印其他外國商の輸入品は美麗なる精圓若くは圓形紙製の箱を用ひ凡を軸數百二十本位を以て一包とし一箱の容量八百二十包或は七百二十包を以て荷造し一箱毎に薄き針丹を以て内側を蔽ひ松板を用ひて箱とす

第六 一ダースを稱するものは幾箱あるや

答 一ダースは十二箱を稱すれども賣買間に於ては一包又は一箱とす

第七 製造地より當京城迄運搬の實況及び海陸の運賃關稅人馬賃錢は如何

答 大坂より輸入するものは概ね汽船に據りて積出日より凡そ日數二十日を要す其諸入費の割合は左の如し

六百ダース入に付	大坂より神戶迄	廿五錢
六百ダース入に付	神戶より神戶迄	廿五錢
六百ダース入に付	神戶より仁川迄	廿五錢
六百ダース入に付	仁川より神戶迄	廿五錢
六百ダース入に付	仁川より仁川迄	廿五錢
六百ダース入に付	仁川より仁川迄	廿五錢
六百ダース入に付	仁川より仁川迄	廿五錢
六百ダース入に付	仁川より仁川迄	廿五錢

第八 一箱買一ダース賣の相場如何

答 卸賣相場は安全質百ダースに付凡二圓二十錢、一包に付二圓三厘、危險質百ダースに付金二圓四十錢一包金二圓五厘

第九 最近一年間又は一箇月間の輸入高幾何

輸入高、賣上高は各商より其精細なる事實を知り難しと高を見るに本邦人の輸入高は廿四十七錢にして一昨年二千三百三十三兩にして三倍四分の増加なるに倍の勢あり

○名譽領事の日本慈善會 英國 賽領事サー・エドワード・ポースト、ムを發金し同志と共に四月と間開會したる由にて近頃到着結果を爲したる由にて近頃到着上代金は費用を引去りて五千五百三十五圓九百九十九圓十錢と三萬五千四百四十九圓十錢を開會前に議決したる如く之を三とし一は倍償慰勞費とし一は會費の爲めに施與するものと既に報告と云ふ

○人口増加を妨ぐる物 佛國のモナコとその原因を探ぬるに、婦入り、娘に嫁せぬ、メウリ、兩人を人口増加を食ひ止む、説ありランセットと云へる英學士に由て見れば天然痘とタイフスに死亡の異常なる大数は又之が傳染士アルアルトは此次第、於ては年々天然痘の爲めに死す、佛國に於ては一萬四千人、爲めに死する者は實に四萬人、痘を強行するものと緩慢するものとに歸せざるを得ずアルアル、の論文を結んで云く若し佛國、ガク、チン、ティン、とは何、さるふとなり又何處の町へ、ありなれば佛國は年々、二萬五、助くるに至る可し加之是等、適したる壯男壯女なりと近、食島の拂底 昨年の當期は、城・千葉、埼玉、神奈川、長野、は副産ともいふべき家畜類を、全く穀物の高直に飼養する、左れば昨年は本年より米價の、直なりにも拘らず府下食鳥、カハ一貫目に付六十錢、次騰貴し昨今は仲間取引一貫、しかば小賣は、隨つて尙高直、昨年以降卵を孵化する農家、は此際大に減じたるに付、今、各産地より輸入する鳥類、目に過ぎざる景氣とありしか、なにて時に品切れの日もあ、ある今日なれば買捌け、買行減ずると同時に鳥肉の需出、其節は相場も益々高直を現、頃に至り今春孵化せし雛鳥、常の相場に復するべし

○新刊書 近時政論考、陸實氏の著述に、